

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20730435

研究課題名（和文） 青年後期から成人初期にかけてのアイデンティティの揺らぎと両親間不和に関する研究

研究課題名（英文） Identity fluctuation and interparental discord in late adolescence and early adulthood

研究代表者

宇都宮 博（UTSUNOMIYA HIROSHI）

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：10320152

研究成果の概要（和文）：

源家族からの巣立ちの時期とされる青年後期や成人初期において、両親の結婚生活の文脈は子どもの発達にどのような意味を有するのでしょうか。とくにわが国では、永続性の観念にもとづき、不和状態でありながらも結婚生活を続けている夫婦は相当数いることが推測される。本研究では、アイデンティティ発達に焦点を当て、両親間不和による発達の影響を実証的に検討した。両親がいる若年成人子および彼らの親世代の人々を対象とする調査研究を通して、両親間の不和がアイデンティティおよび家庭役割（配偶者役割・親役割）の獲得において否定的に作用する可能性があることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

In Japan, the social norm against the divorce of couples with children is strong, and many couples share these values. Therefore it is likely that even when the quality of a marriage declines, a number of parents do not get divorced. The present study empirically investigated the effect of interparental discord on the development of children's identity. Participants were young adults whose parents were still alive and married, and their parental generation. The results suggested that interparental discord might have negative effects on the development of the children's identity and their family role fulfillment as adults.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総 計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：両親間不和・アイデンティティ・成人初期・家庭役割

1. 研究開始当初の背景

若年成人の親への依存や巣立ちをめぐる問題は、晩婚化や少子化と相まって、今や大きな社会的関心事となっている。若者が親元を離れる、いわゆる“離家行動”の意思決定には様々な要因が関与していると考えられるが、その一因として源家族の機能不全が指摘される。そうした場合、両親の潜在的・顕在的な葛藤は、被養育的立場でなくなった成人期においても、子どもたちのアイデンティティ発達に重大な影響を及ぼすのではないかと考えられる。その一方で、両親が離婚をし、持続的な葛藤状態がみられる場合についても、やはりアイデンティティ発達への深刻な影響が懸念される。欧米では、アイデンティティ発達の研究ではないものの、両親間の不和に巻き込まれることによる心理的影響への関心が高く、若年成人を対象とする実証的研究も次第に取り組み始めている（例えば、Amato & Afifi, 2006 ; Kline, Wood, & Moore, 2003 ; Turner & Kopiec, 2006）。

アイデンティティの探求や危機の様相については、Erikson, E. H. が概念を提起して以降、現在に至るまでに多くの研究者によって検証されてきた。アイデンティティ発達と家族関係の関連についても、例外ではない。しかしながら、その大部分は、親との愛着や養育態度といった親子関係に関するものであり、我が国では、両親の夫婦サブシステムの視点は、いまだ十分に検討されていない（宇都宮・平井, 2002 ; 宇都宮・岡本, 1997）。

そうした状況を受け、筆者はこれまでに我が国の青年を対象に、いくつかの調査研究を行ってきた（例えば、宇都宮, 2004 ; 宇都宮, 2005）。また、平成 17～19 年度の 3 カ年では、科学研究費 若手研究 (B) として「両親の夫婦間不和と青年のアイデンティティ発達に関

する実証的研究」にも取り組んできた（宇都宮, 2007a ; 宇都宮, 2007b ; 宇都宮, 2007c）。これまでの研究を通して、青年後期に深刻な両親間不和に巻き込まれた子どもの、アイデンティティ探求の歪みや積極的関与の乏しさが確認されるとともに、成人期に移行しても、源家族からのとらわれによってアイデンティティの構築が困難である可能性が示唆されている。

2. 研究の目的

本研究は、主として成人初期に位置する人々を対象に、アイデンティティ発達と両親間不和の関連性について多角的に検討するものである。両親間不和の指標には、これまでの多くの研究で検討されてきた葛藤とそれへの巻き込まれを取り上げる。

本研究は、オンライン調査による計量的分析と聞き取り調査による質的分析とで構成される。計量的分析では、対象者のライフステージをふまえ、彼らの家庭役割の獲得をめぐる問題との関連に焦点を当てることとした。すなわち、家族役割の視点から、調査ごとに対象者を抽出し（「未婚者」（分析 1）、「子どものない有配偶者（分析 2）」、「乳幼児をもつ有配偶者（分析 3）」）、それぞれの置かれた状況によって、異なる要因を結びつけて検討することとした。

また、彼らの老親世代を対象とする調査（分析 4）も実施し、両親間不和および子どもへの影響に関する補足的な分析も行うこととした。

さらに、聞き取り調査（分析 5）による質的分析を導入し、両親間不和が成人初期のアイデンティティ危機および家族役割への適応に与える影響過程について検討する。

3. 研究の方法

(1) 調査対象者および実施手続き

分析 1~4 では、インターネットによるオンライン調査が行われた。このうち分析 1~3 の対象者は、いずれも 20 代ないしは 30 代で、両親が健在かつ結婚生活を継続している成人子（分析 1：509 名，分析 2：479 名，分析 3：463 名）であり，分析 4 の対象者は，全ての子どもが学校教育段階を終了している有配偶者（368 名）であった。分析 5 では子どものいない有配偶者 1 名を対象に，半構造化されたインタビュー調査が実施された。分析 5 のデータに関しては，縦断的調査によって収集された。

(2) 調査内容

分析 1 では，独身者における，両親間葛藤とアイデンティティ発達および結婚に対する態度，交際の有無，交際相手との親密性，父母双方との心理的距離などとの関連性が検討された。

分析 2 では，子どものいない有配偶者における，両親間葛藤とアイデンティティ発達および自分自身の配偶者役割への適応（コミットメント），主観的幸福感，親役割の獲得に関する展望などとの関連性が検討された。

分析 3 では，乳幼児をもつ有配偶者（長子が 4 歳未満）における，両親間葛藤とアイデンティティ発達および自分自身の配偶者役割への適応（コミットメント），親役割への適応（育児感情）などとの関連性が検討された。

分析 4 では，成人子をもつ老親における，夫妻間葛藤への子どもの巻きこみに関する認知について，結婚生活に対する評価，主観的幸福感，およびソーシャル・サポート（情緒的側面）などとの関連から検討された。

分析 5 では，成人初期の配偶者役割および親役割の獲得をめぐるアイデンティティ危機

の様相と両親間葛藤による影響過程について検討された。

4. 研究成果

分析 1~3 を通して，成人初期にいたっても，両親の不和に胸を痛めている子どもがいることが確認された。彼らは，両親の夫婦関係が自分の悩みの種であると認知していた。また，両親間葛藤の巻き込まれの関連要因として，父母双方との心理的距離の非対称性が指摘された。そして，両親間葛藤に巻き込まれている者ほど，アイデンティティ発達が停滞している傾向が見いだされた。両親間葛藤が深刻な状況下では，成人期に移行しても源家族内での子ども役割に翻弄され続けることで，アイデンティティの主体的な探求や獲得が困難になる恐れがあると考えられた。

さらに両親間葛藤への巻き込まれは，未婚者の交際相手との親密性の低さや結婚に対する消極的態度と結びついていた（分析 1）。両親間の不和は，異性との関係性の深まりへの戸惑いや，結婚への抵抗感を強める一因であると考えられた。

子どものいない有配偶者では，主観的幸福感や親役割の獲得に関する認知において，両親間葛藤が否定的に作用していることが示された（分析 2）。対象者の多くは結婚後間もない新婚期であったが，両親間葛藤にさらされている場合，自らの配偶者との関係性を形成する最中に，源家族の課題にも同時に取り組むことになる。そのため，子どもの誕生にともなう親役割の獲得に対して，積極的な展望をもちにくいのではないかと推察された。

乳幼児をもつ有配偶者においては，育児への感情に着目した。その結果，両親の葛藤に巻き込まれることが，対象者自身の結婚生活の不調和を媒介として，否定的な育児感情へとつながっていることが示唆された（分析 3）。

その背後には、不和による老親からのサポート力の低下も関与しているのではないかと考えられた。また、祖父母世代の不和が、孫の発達にも何らかの否定的な影響を有することが懸念された。

分析5の事例は、分析2と同じく子どものいない有配偶者であったが、結婚し独立した後も両親間葛藤での調整役を期待され、介入を余儀なくされる構造が安定していることが確認された。さらに、そのことが自己のアイデンティティの揺らぎや夫婦関係上の問題へと展開する過程が示された。分析2および3の、両親間葛藤に強く巻き込まれていると考えられた人々においても、老親世代の葛藤が子ども世代の家族システムに持ち込まれている構図が存在すると考えられたが、その過程には多様な道筋が想定される。個人差を丁寧に記述していくことが求められる。

補足的に行われた、老親世代の分析からは、子どもを対象としたデータに比べ、自分たちの不和に子どもを巻き込んでいないと認知している傾向が認められた（分析4）。対応のあるデータでの比較ではないため、解釈には注意を要する。しかしながら、老親側と子ども側とで介入や巻き込まれをめぐる認識に食い違いが生じているケースも少なくないのではないかと考えられた。ソーシャル・サポートは、葛藤への子どもの巻き込みに直接関連していなかったが、結婚生活で生じた不和による子どもへの影響を緩衝する役割を有することが示唆された。

以上の分析を通して、両親間不和により、源家族からの心理的な巢立ちに困難さを抱えている者が少なからずいることがうかがわれた。成人期への移行により、両親間不和による相対的な影響力は弱まっていくものの、依然として両親の関係性の脆弱さによって、アイデンティティが不安定になっている場合が

あると推察された。本研究から、成人子が自らのアイデンティティの拠り所として、家族役割を位置づけていく際、ロール・モデルとしての両親の重要性が指摘されるとともに、彼らを選び取った家族役割への関与に安心して専念できるかどうかは、源家族がストレス源となるかサポート源となるかで大きく異なるのではないかと考えられた。

結びとして、本研究の問題点を指摘し、今後の課題を示しておきたい。まず、本研究では両親間不和の指標として葛藤を取り上げたが、葛藤は必ずしも否定的に作用するものばかりでない。建設的な葛藤解決等による肯定的側面からの検討も行うべきであろう。次に、本研究では、両親が結婚生活を継続している者に限っていた。実際には親の離婚を経験した成人子もかなりみられることから、今後はそうした人々を分析対象に加えて、比較検討していくことも必要と考えられる。最後に、本研究では、家族役割の獲得状況に着目したが、獲得する移行期に関する検討は十分にできていない。配偶者役割や親役割を持つようになる過程において、両親の関係性がどのように関与しているかを明らかにしていくことも、今後の重要な課題といえる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

① Utsunomiya, H. (2011). Parents' Marital Quality and Identity Formation among Japanese Late Adolescents. *Social Behavior and Personality: An International Journal*, 39, 1315-1324. (査読有)

② 春日秀朗・宇都宮博 (2011). 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響—子どもの期待に対する反応様式に注目して—. 立命館人間科学研究, 22, 45-55. (査読有)

③ 宇都宮博 (2008). 中高年女性の結婚生活の質と抑うつ—社会的活動、サポート・ネットワークとの関連から—. 立命館人間科学

研究, 17, 25-33. (査読有)

〔学会発表〕(計 10 件)

- ① Utsunomiya, H. (2011, 22, October). Attitudes toward marriage and parents' marital quality: the role of intimacy with the romantic partner. *Poster presented at the International Association for Relationship Research Mini-Conference*, Tuscon, U. S. A.
- ② Utsunomiya, H. (2010, 16, May). Interparental conflict and marital commitment of parents :Effects on adult children' s desire to marry. *Poster presented at the 4th International Self Determination Theory Conference*, Ghent, Belgium.
- ③ Utsunomiya, H. (2009, 19, July). Adolescent perceptions of parental marital quality and identity development: The mediating role of family functioning. *Poster presented at the 14th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Individual Differences*, Evanston, U. S. A.
- ④ Utsunomiya, H. (2008, 10, May). Identity formation and interparental conflict among Japanese late adolescents. *Poster presented at the the XIth European Association for Research on Adolescence conference*, Torino, Italy.

〔図書〕(計 7 件)

- ① 宇都宮博(2012). 家族関係 日本青年心理学会(編) 新・青年心理学ハンドブック. 福村出版. 2012 年 10 月(印刷中)
- ② 宇都宮博 (2011). 夫婦関係のとらえなおし 大川一郎・土田宣明・宇都宮博・奥村由美子・日下菜穂子(編) エピソードでつかむ老年心理学. ミネルヴァ書房. pp. 104-107. (ほか 7 件)
- ③ 宇都宮博 (2010). 夫婦関係の発達・変容ー結婚生活の継続と配偶者との関係性の発達ー 岡本祐子(編). 成人発達臨床心理学ハンドブックー個と関係性からライフサイクルを見るー ナカニシヤ出版. pp. 187-195. (ほか 1 件)
- ④ 宇都宮博 (2010). 両親間不和と子どもの役割ー青年期の発達への影響ー 柏木恵子(編). よくわかる家族心理学. ミネルヴァ書房 pp. 118-119. (ほか 2 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇都宮 博 (UTSUNOMIYA HIROSHI)
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号: 10320152